

NHK放送世論調査所編

『国民生活時間調査・昭和四〇年度』

内山政照

これは、われわれの知的好奇心を、ひどく刺激するデータに満ちた調査書である。そのうち若干部分を、次ぎに紹介してみよう。

(1) 一〇才以上の国民全体の平均について、ある時刻に特定種類の生活行為をしている者の割合——仮りに、同一時刻同一行動率と名付けておく。このデータ自身は膨大なので、ここに掲出できないのが残念——をみると、その率のもっとも高いのは、睡眠である。たとえば土日を除く週日平均（以下同じ）でみると、夜なかの「草木もねむる」丑三つとき二時四五分から三時の間では、九八・六％がねむっている。農林業従事者（男女計）

だけとってみても、その点は変わらない。夜なかの〇時三〇分から三時までの間は、実にその九九％がねむっている。

これにくらべると、他の生活行為はパーセントがぐっと落ちる。たとえば「ひるま働らく」という行為の同一時刻同一行動率は、せいぜい高いときで五一％（午前一一時前後）、五〇％（午後二〜四時）くらいで、くらべものにならない。すべての日本人（一〇才以上男女）の同一時刻に、揃ってする同一行為のなかで、「ねむる」ということが、もっとも共通な行為であることは、ちょっと考えると当り前のようだが、まことに興味深い。

この率が一〇〇％にはならない。つまりそういう万人共通の生活パターンのなかでも、いく分の人間は、それに背いて起きている、という点も注目されるが、とにかく夜なかの睡眠という行為の、同一時刻同一行動率の一〇〇％近い大いさを考えると、ひとは「夜は暗くて働らないから」あるいは「ねむいから」ねる、というより、「ひとがみなねるから」自分もねる。つまり夜の睡眠という行為が、たんに生理的なものというより、むしろ重要な社会的パターンだ、と思わざるをえないのである。食事や労働にくらべると、睡眠ははるかに個人々々の自由度の大きい行為なはずだが……。これがたとえば、極地のように昼夜の別が、一日一二時間ごとに変化しない、いわゆる白夜の続く地域では、どうなっているか。好奇心をそえられるものがある。

この点でもう一つ注意されるのが、「昼の食事」である。男子農林業従事者についてみると、一時四五分～二時の間は、その一四％が食事しているにすぎないのが、二時～三時の間になると、いっ気に四五～五〇％にはね上がる。われわれの従来の農村常識では、農民は仕事のあい間をみて「めしを喰いに帰る」。そして各自がてんでに箱膳（はこたん）をもち出して、めしをかつこむ、というふうだったはずである。それが今日の農民となると、一二時のベルやサイレンを合図として条件反射のように食堂に急ぐ、学生やサラリーマンとあまり変わらない、「昼飯どき」のパターンを示しているわけなのである。つまり現代農民は、たんに生理的欲求としてでなく、社会的行為としての「ひるごはん」をはっきり意識し、それにもとづいて行動するようになりつつある。別言すれば、時刻の観念、ひいてはそれにはさまれて成立する時間の観念が、従来「無時間的」といわれたムラ人の生活の間に、徐々に成立しつつあることのひとつのあらわれとは言えないだろうか。

しかし、朝七時の朝食（二八％）、夜七時の夕食（二七～二九％）は、昼めしほどこの区切りがはっきりしていないが（夜の労働をやめる時刻つまり仕事じまいの時刻）六時は、区切りが相当はつきりしている、それはなぜか。筆者のいくらかの聞き取り調査では、直接にはひるのテレビの人気番組（「おは

なはん」の放映中）をみるために、仕事をやめてめしに帰る、という人が多かった。しかし、それはたまたま、上述の「ひるめしどき」成立のひとつのきっかけを与えたものにすぎないだろうと思う。根底には、このようなテレビへの吸引に表出されるような、もっと大きな変化が進行しているはずなのだ。

ただし、この調査は聞き取り調査で、そのさいに朝めし、ひるめしの時刻を区切りのメドにして質問している。このような調査技術のために、「一二時にひるめし」という答えが多く出てくるということも考えられる。

(2) 睡眠をやめる（つまり起床）時刻を職業別にみると、農林業従事者では朝五時で六四％、六時一四％、七時にはねむっているものは〇・九％に減るが、ホワイトカラーでは、朝五時九四％、六時六一％、七時一四％、八時〇・九％となる。つまり起床時刻は一般に、ホワイトカラーにくらべて農林業従事者はほぼ一時間早い、ということができる。ただし、この調査の調節は一〇月現在で、秋の農繁期にかかっている点に注意。

ついでに就寝時刻をみると、農林業従事者のばあい、夜の二一時になると急に寝るものが増えて三六％、その前の二〇時四五分～二一時の間では一五％だから、「夜の九時」という時刻は多くの農村人にとって「もう寝るとき」と観念されているようだ。これに対して、ホワイトカラーのはうは、それらしい

時刻は約四五分遅くなっている。そして、どちらかというところ、その区切りは農林業従事者ほど判然としていない。つまり寝る人、まだ起きている人マチマチで、寝る時刻に關しての自由度はひろいようである、とすれば、農家のほうは寝る時刻についての社会的パターンの強制（無意識にせよ）が、都市にくらべていくらか強い、というふうにも言えようか。前述の起床時刻についても、その点は同様なことがいえそうである。

(3) 睡眠に次いで同一時刻同一行動率の高いものは、いうまでもなく労働である。男子農林業従事者は朝の七時半から、女子は八時前後から労働は五〇%を越えはじめ、ピークは八〇%に達する。午後は一三時から五〇%を越え（女子は一五分ずれる）ピークは八〇%を越えて、一八時の五一%（女子は一七時三〇分で五〇%を割る）で区切られる。

そして、第一表(A)に示したように、一日の労働時間合計は男子で八時間四五分、女子で七時間半。大企業ホワイトカラーにくらべて、男子はほぼ一時間長い。ことに婦人はホワイトカラーの奥さんにくらべると、はるかに労働時間が大きく、町の勤め人並みに働いている、ということになる。この調査が一〇月の農繁期なので、農閑期にはどうなっているかは、分らないのは残念だが、。そして農繁期という調査時期を考慮に入れると、その差は世間でいわれているほど大きくはない、とも言

えそうだ。たとえば、ホワイトカラーでも、彼の農繁期、たとえば役人の予算時節、会社員の決算期等々について調査すれば、もちろん農林業従事者の一日の労働時間を相当に上まわるであろう。そういうことを考えると、この両者の比較データはむしろ、両者の差異が意外に少ない、という方にウェイトをおいて、読むべきかもしれない。

また、一日の睡眠時間をみると、表示のように、農繁期にもかかわらず、大企業ホワイトカラーとはほとんど変わらない、いな、むしろやや多い目になっている点も、ここで注目される。なお農民の労働時間はどのくらい短縮されたか。まず、戦前昭和一六年に実施された、同種のNHK調査とくらべると、同年秋に農林業者の労働時間は、東北地方で平均九〜一〇時間、関東・近畿地方では九時間一五〜五〇分、中国・四国・九州地方となると一〇〜一時間となっていた。しかも、これらの労働時間は、農作、養畜、および農産物の売買に費される時間で、そのほかに當時としては、夜なべの手仕事（むしろ作り、俵あみ、機織り）の時間が、平均三〇〜五〇分あった。それを加算すると、実質的な労働時間は短い地方でも一〇時間〜一〇時間半、長い地方では一〇時間半〜一一時間半という結果になる（NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間』一七九ページ）。今回の昭和四〇年秋季調査の農林業従事者男女計の労働時間（自

第1表 1日24時間の各生活行為への配分——農家とサラリーマンとの比較
(A) その行為を行なわなかったものまで含めた平均時間量
(昭和40年10月調査、平日分)

	農林業従事者			農業世帯 の 家庭婦人	大企業ホワイトカラー			(参考) 昭和35年 農林業者
	男女計	男 子	女 子		男 女	家 婦 人	庭 人	
	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	
す い み ん	7 56	8 07	7 39	7 52	7 55	7 35	7 56	
労 働 計	8 12	8 45	7 25	5 38	7 50	1 20	7 48	
うち 自宅内	—	2 24	1 42	1 33	16	48	—	
食 事	1 20	1 20	1 19	1 22	1 12	1 33	1 14	
身の回りの用事	31	32	30	31	46	38	19	
勉 強	00	00	00	00	07	01	03	
家 事	1 52	28	3 54	5 17	53	7 59	2 31	
交 際	42	49	32	30	30	52	34	
休 養	55	1 05	42	44	46	1 06	1 06	
趣 味	11	14	08	15	33	28	14	
外 出	28	30	24	19	1 17	24	20	
新聞・雑誌・本	19	27	08	08	1 04	39	25	
ラ ジ オ	25	24	27	15	18	28	2 00	
テ レ ビ	2 41	2 48	2 31	2 36	2 27	4 31	24	

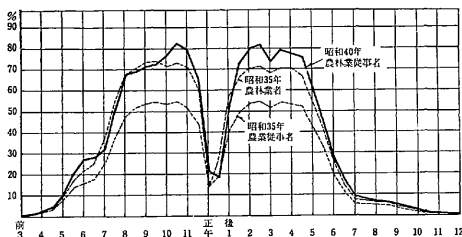
(B) その行為をした者だけについての平均時間量 (昭和40年10月調査、平日分)

	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分	時間 分
す い み ん	7 56	8 07	7 40	7 52	7 55	7 35	
労 働 計	8 40	9 07	8 03	6 55	8 08	4 57	
うち 自宅内	3 26	3 30	3 17	3 30	1 15	1 30	
食 事	1 20	1 20	1 19	1 22	1 12	1 34	
身の回りの用事	35	36	34	36	49	46	
勉強	00	00	00	00	2 57	1 30	
家事	3 15	1 30	4 05	5 25	1 54	8 02	
交 際	2 37	2 40	2 31	2 22	1 32	2 13	
休 養	1 31	1 36	1 20	1 21	1 14	1 56	
趣 味	2 14	2 05	2 45	3 15	59	2 03	
外 出	1 07	1 10	1 20	1 07	1 25	1 06	
新聞・雑誌・本	49	50	43	41	1 19	1 01	
ラ ジ オ	2 32	2 28	2 38	1 49	1 19	2 43	
テ レ ビ	3 02	3 06	2 57	2 58	2 42	4 41	

- 注 (1) NHK放送世論調査所編『国民生活時間調査、昭和40年度』。但し農林業従事者の男女別および農業世帯の家庭婦人のデータは、上掲書に掲出されていない。同所員中西氏の好意により原票よりえた。
(2) 昭和35年データは、NHK『昭和35年・国民生活時間調査、資料編VI(時間量)』の産業別「農林業」データの男女計の1/2(男女半々として)を計上した。ただしこれは前者とちがって四季・平日平均の数字。
(3) 大企業は、従業員500名以上の事業所。
(4) 外出は通勤・通学その他の往復時間。外出先までの時間はそれぞれの別項目に計上。

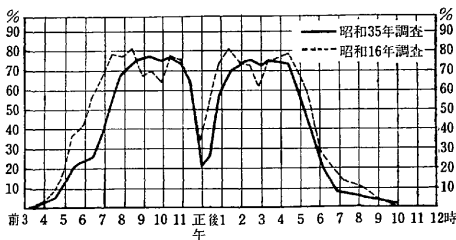
宅内労働を含む。また農作業のみならず、手仕事、兼業のための労働、その他すべて収入をうるための労働を含む。八時間二分との間に、二時間ないし三時間余の差がみられる。この間に、実に大きな労働時間の短縮があったことが分る。

第1図 農林業従事者の時刻別労働従事率分布
——昭和35～40年比較——



(資料) NHK放送世論調査所編『国民生活時間調査、各年』、いずれも秋季平日。

第2図 農林業従事者の時刻別労働従事率分布(平日)
——昭和16～35年比較——



(資料) NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間』180頁。

ただし、昭和三五年と比較すると(同年は産業分類の「農林業者」しか発表されていない。そして第1表(A)掲出の参考データは四季平均数字であるので、直接には比較できないが)、あまりちがわないか、あるいはいくらか延長気味である。第一図

によって同じ秋季の時刻別労働従事率分布をみても、むしろ昭和四〇年のほうが若干上まわっている様相がうかがわれる。第二図は戦前と昭和三年データとの比較（産業分類）であるが、これをみると労働時間の短縮は、むしろ戦前と昭和三年間が大きくて、昭和三五と四〇年間はむしろやや増大ぎみ、とみざるをえない。つまり、この間の労働力流出などが、農業の技術進歩による農業労働時間短縮を張消しにして余りがあった、ということになろうか（この労働時間は前述のとおり、無作業に限らずすべての収入をうるための労働で男女計）。

(4) 次ぎに同一時刻同一行動率の高いものをひろってゆくと、「テレビ視聴」にぶつかる。農業従事者についてみると、夜の一九時一五分～二時までのいわゆるゴールデンアワーには、テレビを視聴しているものの割合は、実に五〇％以上に達する。ことに一九時四五分～二時までの間は、五九～六一％。しかもそのうち、何か他に別の仕事をしながら視るのでなく、テレビ視聴だけするものが、四一～四七％なのである。そして、このテレビ視聴の高さは、他の職業たとえばホワイトカラーのピーク時刻二〇時一五分～二時における五二～五五％を上まわるもので、農業従事者の同一時刻同一行動率としては、真夜の睡眠の九九％に次いで大きい、という点は注目される。

また、一日二四時間のうちの生活時間量の分布のなかでも、

第1表(A)に示したように、テレビ視聴時間は二時間半から二時間五〇分近くに及び、睡眠・労働に次ぐ大いさをもっている。

テレビ視聴をしたもののみの平均についてみると、第1表(B)のとおり、それはさらに三時間になる。今日の農家において、テレビをみる、ということとは、ねむり、働らく、という行為に次いでウエイトの重い、また、パターンの同一性の強い行動なのである。農家もついにマス・レジャー時代の波をかぶり、もはや時代の風の圏外で静かな田園生活を送ることができなくなっていることの、ひとつの有力な指標ではないか。と同時に、前述のように戦前に比較していちじるしく短縮した労働時間、従って増大した余暇時間が、こうしてテレビに大きく占領されていることは、その悪悪の評価を別として、注目すべきであろう。

(5) 以上、同一時刻同一行動率の高い生活行動について、若干のデータを紹介してきた。それは睡眠・労働・テレビ視聴（「休養」というより、より内容的に）の三つで、その他の生活行為は、これら三つにくらべると問題にならないほど、率も低いし、また一日のうちの生活時間量も小さい。つまりこれを別言すれば、農民は夜九時にねて、八時間ねむって朝五時か六時に起きて、午前中の働らきに出る。ひるめしを一二時の時を見計ってたべ、夕方は六時に仕事をしよう。夕食ののちテレビを二時間余りみて、九時にはねむってしまうというパターンが

支配的で、これから外れるものは、ごく少ない（調査報告書には、時間調査にも標準偏差が算出されているので、この点便利）ということなのである。そしてこの点については、朝晩の時刻に約一時間のずれがあるとはいへ、大企業ホワイトカラーのばあいとさ程大きなちがいはないことも、このさい注意さるべきであらう。

(6) その他のこまかな生活行為について、くわしい吟味を加えるのも、きわめて興味深い作業であるが、ここでは試みにそのうちの一つ、「外出」だけをとり出してみよう。第2表は、主要な職業別、市郡別、地方別に一日の外出時間を示したもののつまり外出先きでの消費時間を別にして、職場や田畑への往復、その他のいわゆる外出に、往復どれくらいの時間を費したかを掲げたものである。くわしい比較は表によって各自試みられれば、それぞれ興味深い情報を得られるはずであるが、ここでは現代社会の主役Ⅱ従業員五〇〇名以上の大企業のホワイトカラーと農林業従事者との比較を主にしてみよう。

第2表によると、外出しなかったものまで含めた平均時間量は（A欄）、大企業ホワイトカラーの一時間一七分に對し、農林業従事者は約三分の一の二八分。地方都市に多いはずの中小企業ブルーカラーでも五五分だから、平均するとあらゆる職業人のうちで農業者が、もっとも外出の往復時間の少ない部類に属

していることが分る。これは「大企業ホワイトカラーの家庭婦人」、つまりサラリーマンの奥さんの二四分とほぼ等しい水準（この調査が農繁期で外出がひかえられる時期に当たっている点（注意）。農家の主婦にいたってはもっと少なく、一九分。それでも五年前の昭和三五年の同じデータと比較すると、農林業従事者の男女計で二〇分→二八分、女だけについてみると一四分→二四分（ただし昭和三五年データは四季平均））といちじらしい伸長ぶりである。

さらに、外出の目的別にこれを吟味すると、第3表のように、その大部分は仕事のための外出である。つまり農業者はサラリーマンとちがって生活と生産の場所が分離されていないのだから、外出の往復時間が少ないサラリーマンの家庭婦人並みになるのも当然であらう。だが、外出をしたもののみにしてみると（第2表B欄）、農業者も一時間七分、サラリーマンなどに比較して、それ程小さくはないことは、注目すべきであらう。

また、この目的別データのなかで目立つのは、交際目的の外出の往復時間で、農家のばあいすべて四分、これは大企業ホワイトカラーの六分、その主婦の七分にくらべるとやや少ないが、中小企業ブルーカラーの三分にくらべて大きいことも面白い。さらに外出先きでの消費時間をみた第4表によると、交際に費した時間は農林業従事者男子の三六分がトップであり、農家の

第2表 1 日 の 外 出 時 間

	A. 外出しなかつたものまで含めた平均時間量	B. 外出したものだけの平均時間量
	時間 分	時間 分
大企業ホワイトカラー	1 17	1 25
中小企業ブルーカラー	55	1 08
農林業従事者(男女計)	28	1 07
〃 (男)	30	1 10
〃 (女)	24	1 02
大企業ホワイトカラーの家庭婦人	24	1 06
農業世帯の家庭婦人	19	1 07
全 国	44	1 11
区 部	50	1 15
市 部	42	1 06
郡 部	44	1 14
北海道	34	59
東北	36	1 02
関東	51	1 19
甲信越	42	1 12
中部	43	1 09
近畿	44	1 12
中国	41	1 07
四国	43	1 03
九州	47	1 12
東京都 区 部	53	1 19

(資料) NHK『国民生活時間調査・昭和40年度』ただし、農林業従事者の内訳データは結果表原票より補足した。

第3表 外出の目的別・往復時間量

	目的別・外出の往復時間量(第2表のA欄について)						
	労働	勉強	家事	交際	休養	趣味	「その他」を 含めて計
	時間 分	分	分	分	分	分	時間 分
大企業ホワイトカラー	1 01	01	02	06	01	03	1 17
中小企業ブルーカラー	45	01	02	03	01	02	55
農林業従事者(男女計)	18	00	02	04	01	01	28
〃 (男)	20	00	01	04	01	02	30
〃 (女)	16	00	02	04	02	00	24
大企業ホワイトカラーの家庭婦人	03	00	08	09	01	02	24
農業世帯の家庭婦人	08	00	02	04	02	02	19

(資料) NHK『国民生活時間調査・昭和40年度』より計算。

第4表 外出先までの消費時間

	自宅外（外出先）での消費時間量					(備考) サン プル 数
	労 働	勉 強	家 事	交 際	趣 味	
	時間 分	分	時間 分	分	分	
大企業ホワイトカラー	6 34	03	07	23	22	582
中小企業ブルーカラー	7 35	04	08	17	17	1,048
農林業従事者（平均）	6 05	00	09	28	09	1,280
〃（男）	6 21	00	08	36	11	757
〃（女）	5 43	00	11	15	06	523
大企業ホワイトカラー の家庭婦人	32	00	1 00	29	10	331
農業世帯の家庭婦人	4 05	00	19	21	11	417

婦人でさえも他にくらべて決して低くない。この調査が農作業一本に精力を注いでいる一〇月の農繁期のそれであることを考慮すると、農家の人々にとつての交際ということの特殊な重みが、これを読むものにひびいてくるようなデータだと思う。サラリーマンの家庭婦人もこの点では二九分で農家レベル、つまり地域に密着して生きるもの（ゲマインシャフト）の住人は、ほぼ一日平均三〇分は出かけて「つき合い」に費さねばならない、というふうにも読めようか。

さて以上は、たんに一日の外出の住復時間量についてだけみたわけだが、いま仮りにその往復に利用する交通手段がすべて等しい、と仮定すると、その数字は当然、同時に外出距離を示す指標となる。とすれば第2表は、農業者の日常の平均移動距離は大会社などのサラリーマンにくらべて約三分の一、サラリーマンなどがふつう電車などの交通機関を利用するとすれば、実さいの移動の地理的距離の較差はこれよりはるかに大きくなるはずである。これを別な側面から行動半径の大きさとし、社会圏の広さを比較してみると、それは三分の一の自乗、九分の一ということになるだろう。さらに第3表によって、それぞれ労働圏、勉強圏、家事圏、交際圏、休養圏、趣味圏……と別々に計算してみると面白い。

要するに農業者は、交際を別とすれば、他の職業人にくらべ

て日常の行動半径が小さく、きわ立って土着的だといえる。だが、同じ農家人のなかでも、兼業通勤者や学生などは、もちろんそれぞれの職業人なみの広い行動半径で動くわけで、一つの家族のなかで大小ちがった行動半径のもち主が同居しながら生活する、という事態になっている。農家族内部での社会的交錯という観点から、この点は重視されるべきデータであろう。

この調査は、戦前昭和一六年に実施された、同じくNHK生活時間調査の趣旨をひき継ぎ、さらに拡充完備されて昭和三五年に第一回が実施された（報告書は総研図書館にある）。そしてここに紹介したのは第二回、昭和四〇年のものである。そしてこの調査は社会調査としてはまれにみる大規模かつ組織的なものであり、われわれにきわめて豊富な情報を与えてくれる。それだけに、今後各方面からの活発な批判吟味によって、より精密かつ内容の豊かなものにしていく必要が大きいであろう。いま、ここでこれを十分に作る余裕はないが、さし当り気付いた点二、三を記しておく。

まず、調査時期の問題。年一回の調査（ただし三五年は四季に実施）ということになると、時期としていつを選ぶべきか。この調査は——恐らくは国勢調査にならって——一〇月に実施されているが、一〇月は春五、六月に次いで農家の農繁期に

当る（農林省『農家労働統計』にくわしい）。そもそもなぜ国勢調査が一〇月に行なわれてきたか、筆者はその事情を知らないが、ここにこの種の生活時間調査については、この調査時期は再検討されるべきであろう。

もっと本質的なことは、生活行為の範ちゅう区分についてである。経済的統計ならば、たとえば土地・労働・資本というようないしそれから派生した理論的なそれが、広く誰れ人にも承認される仕方で設定されうるはずだが、社会統計ことに「生活」統計ということになると、それは未だ確定していないといわざるをえない。この点については、従って今後検討されるべき点が多いことは、いう迄もないのである。またついでは、農家「自体」についてもそうだが（東畑、神谷編『現代日本の農業と農民』九〇頁以下）、直接には農家の家族員の範ちゅう分けについても、難しい問題を含んでいる。たとえばこの調査では、農林業従事者の男・女と農業世帯の家庭婦人、というふうに分けているが、女性農業者をみると、第1表のように家事時間が四時間近くにもなっている、サラリーマン家庭の主婦になる。いっぽう農業世帯の家庭婦人を見ると、労働時間が五時間三十八分にもなっている、それとは対比し難い、というようになっている。一生活」という観点から見ると、農家生活の事態自体がその通りなのだから仕方ない、とはいうものの、それで

はこの両者（農業従事者女と農業世帯の家庭婦人）は一体、何を区別しているのか、はっきりしなくなってしまう。サラリーマン家庭、サラリーマン生活を基準として分類してゆこうとすると、どうしてもこうならざるをえないわけである。

この点では、印刷発表のスタイルについても問題がある。つまり一般に印刷公表された報告書のなかには、農業従事者一本で、男女別と農業世帯の家庭婦人に関するデータは省略削除されている。ほかのサラリーマンなどについてはこまかな分類を試み、それぞれのデータはフルに印刷公表されているのに、これはどうしたものか。農業者ないしその家庭婦人といっても、その数は決して少なくはないし、また上述のデータの暗示しているように、ヘテロジーニアスな生活パターンを示しているのだから、簡単に一本にまとめて済ませる、ということとはできないであろう。聴取者のウエイト、という直接の点からいっても、もっと重視されてもいいはずだと思うのは、筆者の我田引水の高目からだけであろうか。

しかし、実施の突さいの衝に当たられた、NHK世論調査所中西氏の好意あるご配慮によって、われわれは報告書から削除されていた上記の農業者関係のこまかな数値を入手することができ、総研の図書館には完全な形のデータを備えることができた。研究員諸兄の多様な利用を期して、本稿を記した次第。わ

たくしが諸兄の食欲をどれほどかきたてることができたか疑わしいが。

なお、この調査結果の解説書として、NHK放送世論調査所編・中西尚道著『テレビと生活時間』が刊行されたことを、附記する。